閃光は　突然

襲ってきた

―――生と死を分けたもの―――

梶矢　文昭

昭和十四年三月　生
被爆時の年齢　六歳
被爆地　東区大須賀町（一・八キロ）
最終勤務校　市立長東小学校

序

私は国民学校（小学校）一年生のとき、爆心地より一・八キロの上大須賀町で被爆した。その時のことは、今も脳裏から消え去ることのない記憶として浮かび上がってくる。

被爆体験回想

その日の朝、いったん警戒警報が出、間もなく解除されたという。寝入りばなを何度もたたき起こされて、防空壕の中にかけ込んだ記憶があるが、それは八月五日から六日にかけての夜のことかも知れない。

当時、私たち家族は、広島駅まで歩いて七分もあれば行ける山陽本線沿いの大須賀町（現在上大須賀町）、稲荷小路と呼ばれている小路の奥まったところに住んでいた。そのお稲荷さんの名前は「飛泉稲荷」といい、江戸時代の大台風の折、泉邸（縮景園）内にあつたお稲荷さんの鳥居が風に飛ばされて来て、この地に飛着したのを縁として設けられ、命名されたと伝承されており、現在も元の場所に残っている。

家を出て真っ直ぐなその小路を、いつものように、姉（当時三年生）と連れ立って私たちは登校した。私の母は道まで出て、私たちが角を曲がるまで毎朝見送ってくれていた。

この鳥居が飛んできた泉邸（縮景園)と、大須賀町とは猿候川を挟んで対岸になる。原爆記録文学として評価を得ている、原民喜の「夏の花」で、泉邸に避難していた原民喜が「対岸の火事が勢を増して来た。こちら側（泉邸）まで火照りが反射して来るので、満潮の川水に座布団を浸しては頭にかむる。」と描写している対岸一帯が大須賀町である。

その日の朝も、母は、姉と私が小路の角を曲がるまで見送ってくれた。

夏休みの八月であったから、荒神町国民学校には行かず、子供たちは町内の民家を借りて設けられていた臨時の分教場（分散授業所）に集まって勉強のようなことをしていた。八時十五分は、勉強が始まる前の朝掃除の時間帯だった。

玄関をふき掃除していて汚れたバケツの水を私が替えにゆくことで姉に文句をいい、むずかる私の代わりに、姉がバケツを持って奥まった台所の方に入っていった。その後、姉が戻って来るまで私はなんとなく座敷越しに見える外の景色を見ていた。飛行機の爆音を耳にしていて、外の方に目を向けていたのかも知れない。

その時、突然、目もくらむような白色光が視界を覆った。黒かった向かいの屋根瓦が白色光の中に消え、逆に庭のやつでの葉が陰画のように黒く目に残った。光に音はないはずだが、なにか空気を切り裂くようなパシューッというような音が走ったように思う‥‥。その閃光の瞬間からどれくらいの間か、わずかだと思うが記憶がないのである。

私は暗がりの中にうずくまっていた。

危険の中にいる小動物のようにじっと身を固めていた。やがて家が崩れてきた家屋の下敷きになっていることが分かってきた。壁土も崩れているのだろう、赤土と竹と藁のすえたような匂いが鼻をついてくる。

土煙がうすくなりぼんやりと見えてくると、私は、柱と柱が複雑に折り重なっている下にできた隙間にいるのを感じた。泣き叫んだかもわからない。が、だれも助けに来てくれる者などない。私は、上の方に向かって、わずかに見える空の方へ向かって、わずかな隙間を必死になって抜け出そうとした。壁土を押し上げたり、何かを噛み切ったりした記憶がある。柱と柱の隙間を体をよじりながら這い上がる。壁土や柱を頭や背中で押し上げた記憶もある。やっと脱出したのは、崩れた家屋の屋根が破れたところからであった。

その時見たのは ― 下敷きから逃れ出て最初に見た光景は ― 目の前をぞろぞろ逃れていく被災者の人の異様な行列であった。

男、女、大人、子供、民間人、軍人もいたかも知れない。被災直後の人々の群れを小学校一年生の私に識別する能力などない。ただ、みんな一様に体をひこずるような重い動きで同じ方向によどんだ川の流れのように動いていた。

私も、いつの間にかその人たちの中に入って、前後の人の腰にはさまれるようにして逃げていった。

分教場があったのは、当時の東練兵場の南のはずれ辺り（現在の新幹線ホーム西端辺り）で、すぐに騎兵隊弾薬庫の土手があった。その土手に沿って側溝があり、道は山陽本線第四踏切（現在の大須賀踏切）に向かって真っ直ぐな上り坂になっていた。坂の下から、逃れていく人の流れが、長い長い列となって続いているのが見えた。子供の足でも十分付いて行けるほどの重い苦しい足取りであった。踏切への上り坂になって側溝を見たとき、軍馬があおのけに腹がぱんぱんになって死んでいるのが見えた。

逃げていく周りの人々は、血を流し、あるいは皮膚を焼かれ、骨を砕かれ、着衣もやぶれた被災者の群れである。しかし、気持ちが悪いとか、怖いとか思った記憶はない。そんなものは、平常時の感覚、余裕のある状況で生じる感情なのであろう。自らも被災者であり、額から血を流し、大変な状況の中、子供心にも、今が生死の境であることを感じて、ただ死にたくない、何とか逃げなくては、とそれだけで必死に行動していたのだと思う。

逃げていく人々は、坂を上って細道を下り、そこから鶴羽神社への道へ逃れ、それから饒津神社の前を通って川沿いの道へと続いていった。

饒津神社の横を通っているとき、道沿いの家の中に火の手が上がるのが見えた。突然家の中から炎がいっきに噴き出してきて、屋根の庇にかけ上がっていく。その時だけ、ワァーと避難していく人の流れは乱れたが、そこを過ぎるとまたもとのように身をひきずってただ逃れた。

川沿いの家は途切れ、左手の川は二又土手の所で大きく曲がり、対岸の白島九軒町側に白州が広がっている。対岸の被災者が、その白州に向かって、石段を土石流のようになだれ下りて行くのが見えた。

すでに白州には人があふれ、何人かはひざや胸までと水の中に入っていく。

そして、今もまざまざと記憶にあるのだが、命絶えた人たちなのか、何体も何体も水に浮いたまま流れていく。

一体、二体ではない。数えようとして数え切れないほど。それは、上流の方からもつぎつぎと流木のように流れて来る。目の前の白島側では、水の中にいた人が伏せるように倒れてまた流されていくのである。

後で考えて、どうしてこんなに明瞭に記憶に残っているのか不思議である。立ち止まって見ていたのだろうか。あるいは、それを見ながら歩いてゆけるほどのゆるい歩みであったのだろうか。

もう一つ解せないことがある。家の下敷きから辛うじて逃れ出た私は、当然はだしであったはずだ。道にはガラスをはじめ、さまざまな破壊物が散乱していたはずである。私だけではない。ほとんどの人が何も履かず逃げていたと思う。しかも焼けるような夏の道をどうやって歩いていったのだろう。人の列は饒津神社が途切れた所から、山の手に逃れる人と、そのまま川沿いの道を戸坂の方へ逃れる人とに分かれたようである。私は本能のまま、目の前の大人の人に付いて行くことだけに必死で、どこでどうなったのか、右側へ分かれていく方へついていっていた。

いつの間にか、二葉山裏手から牛田の山につながっていく山の中腹の少し開けたところにいた。

斜面を掘り抜いた大きめの防空壕があり、そこに人々が集まっていた。その防空壕の中に連れて行かれて傷の手当を受けた。それまで、自分では分からなかったのだが、左目の上の眉の辺りにかなりの裂傷があり、血が顔を汚していたようで、シャツの胸のあたりにも血がいっぱいついていた。腕からも足からも血が出ていた。治療といっても、ただ赤チンをちょちょっと塗ってもらっただけのことではあるが。

そこで初めて知ったひとに出会った。それは、私の家のはす向かいのFさんというおばさんであった。そのおばさんもここへ逃れて来ていたのである。重症の人は防空壕の中に置かれていたようだが、まだ自分で行動できる者は防空壕の前に少し開けた場所があり、たくさんの人が座り込んでひろしまの町が燃え上がっていくのを見つめていた。

二葉山の中腹といっても、裏側の四、五十メートルの高さになるぐらいの所。二葉山の山かげになって広島駅や大須賀町の方は見えなかったが、目の下に広がる白島や基町、遠く己斐の方にかけて、家並みが、天を突くような黒煙を上げながら延々と燃えていくのを見ていた。まさに、一面、火の海となって広がっていた。みんなは、燃え上がっていく町の方へ顔を向けたままであった。目の前で起こったことが、どういうものであったかも分からず、燃えている町を見ながら、あるいは家族のことを案じ、あるいは広島の町の栄光を思っていたかも知れぬ。

朝から燃え始め、昼にかけてなお燃え盛り、やっと衰えを見せ始めたのは夕方頃になってからだったと思う。自分の家を焼き、あるいは火の中に肉親や友人、知人の安否を思い、大人たちは、その時子供であった私には想像もできない思いで火を見つめていたのだろう。

やっと火が衰えを見せ、道が通れるようになったということなのか、あるいは、いても立ってもおられないということだったのか、Fおばさんは夕刻近く、私を連れて山を下りてくれた。逃れた道を逆にたどり、饒津神社まえから鶴羽神社まえを通り、東照宮から東練兵場へと出た。

当時、二葉山から広島駅にかけての一帯が東練兵場であったが、燃える町の側をできるだけ避けて、被災者は山側の斜面の草原の一面にあふれていた。立って歩いているものはまばらで、ほとんどが横たわっていて、うめき、うごめいていた。あるいはしゃがみこんでいた。

その間を縫うようにFさんについて歩いて行った。私の父や母を捜してくれていたようである。Fさんも家族や身寄りを捜していたにちがいない。

もう、陽は落ち薄暗くなりかけていたように思う。犬が一匹、人のあいだを縫うようにしながら、あちらに行ったり、こちらに来たり、立ち止まったりしながら、歩き回っていたのを覚えている。犬も主人を探し回っていたのだろう。

私たちの歩く気配を感じてか、「水をください」「水をください」という声があちらこちらから聞こえてきた。よく聞けば「みず、みず」という声やうめき声は、辺り一帯から地鳴りのように湧き、低く地を覆うように響いていた。

Fさんは、私の父母が避難しているという情報をだれかから得たようで、私の手を強くひいて、軍艦山（二葉山南東の小さな丘）のふもとの被災者の群れの方へ連れていってくれた。

その中に母がいて、呻いていた。

母は、頭から顔から何かの布をさいた包帯のようなものでくるぐる巻きにされていたが、血で真っ赤になり、なお、首筋を伝って血がしたたっていた。着ているものみな血がにじんで「うーん、うーん」と呻いていた。

後で聞いたのだが、母は私たちを見送ったあと、家に入って、窓のそばで縫い物をしていたという。その時、突然襲ってきた原爆の衝撃波は窓ガラスを木っ端微塵に砕き、そのガラス片が散弾銃のように体に突き刺さったのである。特に、皮膚がさらけ出されていた部位は損傷がひどく、頬は一〇センチにわたってザックリと裂けていた。額、首、胸部に刺さった鋭角のガラス小片は五十、六十に及び、いくつかは、生涯、体内に残ったままとなった。悲劇的なのは、左眼球にも突き刺さったことである。やっと柱の下から救い出した父がそれを見つけ、指でつまんで引き抜いたのであるが、その時の激痛は「だれに言ってもとても分かってはもらえんじゃろ」と母が話していたことがある。

もちろんその日以降、母の左眼は視力を失い、生涯、回復することはなかった。

草の上で、血まみれになりながら、おそらく死にまで達する損傷と激痛に耐えていた母なので、私を見ても、言葉も出ず、うめき声を続けているだけであった。

その母の前の草の上に、姉が横たえられていた。その体には損傷が少なく、胸の上に手を合わせて、眠っているような姉の死のそこだけが妙に静かで、白く浮かんで見える顔は、薄暗がりの中でほほえんでいるようにさえ見えた。

姉の死のそばに座っていても、ほとんど感情が動かなかったように思う。目の届く範囲だけでも死は幾十、幾百と目の前にあった。しかし、その時、姉の死の顔から受けた不思議な気持ちは、いつまでも私の心に引っかかり続けるのである。

今日の、たった一日の内になんと多くの人々の死を見てしまったことだろう。

人は生きていく側と死んでいく側に分かれる。姉は死んでいく側の一人になってしまったんだというような、そんな感情であったように思う。

その日の夜は二葉山のふもとの少し小高くなった草はらのなかで、母と姉のそばに、ただ座りこんでいた。

私たちがいた所は軍艦山への上り口（現在の鉄　道病院北）で、辺りは被災者でいっぱいだった。

そこからは、広島駅がほぼ正面に見え、その周辺や遠く町の中心部まで、残り火がまた強くなったり、弱くなったりしていくのを見ていた。

その間、確かに雨の記憶がある。いわゆる黒い雨だったのだろうが、草原の中で、命からがら逃れてきた人たちには、傘も庇もなく、ただぬれていた。むしろ、火照った体、暑い夜には心地好いものとして、被災者たちは身をさらしていたように思う。

父は比較的軽傷だった。母と姉を練兵場に運んだ後、被災者の救済や、町内会のこと、警防団員としての仕事に奔走していたということを後で聞いた。

私たちの所へ戻ってきたのは、もう暗くなってからだったが、死んだものと諦めかけていた私が生きているのを見て、父はとても喜んだ。強く抱きしめて泣いてくれた。

八月六日の夜は、多くの被災者とともに、そのまま草の中で夜を過ごした。

途中、何度も目を覚ましたようだ。が、まだ燃える町、うめき声、断末魔のような声を耳にしながらまた眠る。 これが私の、八月六日であった。

次の日の夜だったか、あるいは三日目だったか、東練兵場で、集められた死体を枕木のように並べ油のようなものをかけて火葬していく黒みがかった炎の色と空の方に向かって広がっていくどす黒い煙を見ていたのを覚えている。

救援活動についての記憶

練兵場に乗り入れてきたトラックの荷台の方へみんなが集まっていって、貰ったむすびにかぶりついたのを覚えている。また別のトラックが来て袋に入った軍用のかんぱんが配られたこともあった。私は、袋の中にこんぺい糖が入っているのを見つけて、かんぱんよりも先にこんぺい糖を口に入れ、口に広がっていった甘みとその時の喜びとを覚えている。

父の里の熊野からも、母の里の大朝からも伯父たちが駆けつけてくれた。また、近隣の市町村や軍部から多くの救援活動もあった。被爆者自身も我が身も顧みず救済活動や復旧活動に立ち上がっていることも忘れてはならない。

私の父の場合、被爆十周年にあたって、昭和三十年八月に当時の広島市長から、次のようなことばのある表彰を受けている。

（前略）原爆による死の壊滅と混乱の中にあって自らを顧みないで　被爆市民のために献身的に尽くされました このことは広島市民の永遠に忘れることの出来ない美しく尊い行為であります （後略）広島市長　　渡邊　忠雄

父たちは、その活動の中で、私の何十倍、いや何百倍のものを見聞きし、体験したことであろう。

あれやこれや、今になって聞いておけばよかったと思うことがいっぱいある。しかし、父も母も伯父も、町内にたくさんいたおじさんおばさんたちも、みんないなくなってしまった。

「永遠に忘れることの出来ない行為」と顕彰された被爆市民の数々の行為も、語り継がれること もなく時の流れとともに消え去っていこうとしているのである。

風化させてはならないというのは信条である。いまだ、生きて語ることが出来る身を感謝しながら、亡くなっていった人々を思う今頃である。

おわり